中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ
中野玲子、松井雄志、林雅子

2026 年 8 月 31 日

# 中央大学アカデミック・サポートセンター　ライティング・ラボ
# 2026 年度前期活動報告書

**抄録**

今学期のセッション数は 335 件（前年同期 375 件）、稼働率は 42.46%（前年同期 46.64%）となり、いずれも前年同期を下回った（Ⅰ-3）。セッション形式の内訳は、対面 178 件（前年同期 197 件）、オンライン 157 件（前年同期 178 件）であった。昨年度に引き続き稼働率が低下しているため、ラボの存在や支援内容に加え、生成系 AI を用いて作成した文章をセッションで検討する意義を学生に伝え、利用促進につなげる必要がある。

今学期に特筆すべき活動としては、昼休みおよび土曜日のセッション開設に向けたニーズ調査と、セッション以外の活動の拡充が挙げられる。昼休みのニーズ調査では、月曜日と金曜日の昼休みにセッションを実施したところ、一定のニーズが確認された。そのため、後期以降も週 2 回程度、昼休みにセッション枠を設置することとする。また、7 月には土曜日にもセッションを実施し、学期末における利用ニーズを調査した。その結果、土曜日の利用は 7 月後半に集中していたことから、来年度以降は前期末に土曜日開室を 2 回実施することを検討したい。

セッション以外の活動としては、出張ガイダンスにおけるワンポイント講座の実施や、高大接続に向けた支援として中央大学附属高等学校を対象としたオンラインセッションを実施した。今後も、多様化するニーズに可能な範囲で応えながら、ライティング・ラボの活動の幅を広げていきたい。

また、学生の生成系 AI 利用状況に関する調査からは、データ数が少ないため慎重な検討が必要ではあるものの、生成系 AI を利用して作成した文章をセッションで検討することの有益性が示唆された。昨年度から続く稼働率の低下には、生成系 AI を利用する学生の増加が一因として考えられる。今後は、生成系 AI を利用する学生にもライティング・ラボを活用してもらえるよう、対話を通じた文章の検討や個別的な支援といった、ラボならではの支援の意義を伝える工夫を進めていきたい。

以　上

**はじめに**

2026 年度前期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき所見を述べる。

## Ⅰ 開室状況と利用実績

### Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2026 年 4 月9日から 2026 年 7 月 29 日までの月～金曜日
開室時間：月曜日・木曜日 10:50～17:40
火曜日 14:10～17:40
水曜日 13:20～16:40
金曜日 11:50～15:50
開室日数：75 日（前年同期 75日）
設置セッション数[1]：796 コマ（前年同期819コマ）

アカデミック・ライティング部門長：尹智鉉
スーパーバイザー（SV）：中野玲子
アソシエイト・スーパーバイザー（ASV）：林雅子
アシスタント・スーパーバイザー（ASV）：松井雄志
シニアチューター（ST）：4名
チューター：9 名

### Ⅰ-2 受付方針 （2026 年度前期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章
   授業で課題となったレポート、発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド、口頭用）、研究計画書、ボランティアセンター報告書、総合政策学部プロジェクト活動報告書
2. 空きがある場合につき、受け付ける文章
   奨学金応募書類に含まれる志望動機書、留学志望書、公務員試験練習課題
   日本語翻訳（授業の課題のみ）
   そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章
3. 受付不可とする文章
   就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）、メールや手紙の文章
   英語の文章[2]、公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

[1] 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

[2] 英語論文を書く前段階の日本語による構想などに関する相談は受け付けている。

## Ⅰ-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数:335 件（前年同期 375 件）（うち対面 178 件、オンライン 157 件）
セッション稼働率:42.46%（前年同期 46.64%）[3]
なお、昼休みと土曜日のニーズ調査を行うため、学期中月・金曜の昼休み、および7月の土曜日3回、開室を実施した。昼休みセッションは通常開室に含めて集計する。土曜開室は長期休業期間の開室と同様、単体で集計する。詳細は【Ⅰ-7 土曜開室】に記す。

図1に、過去5年のセッション稼働率推移を、表1に過去5年の利用数他の推移を示す。

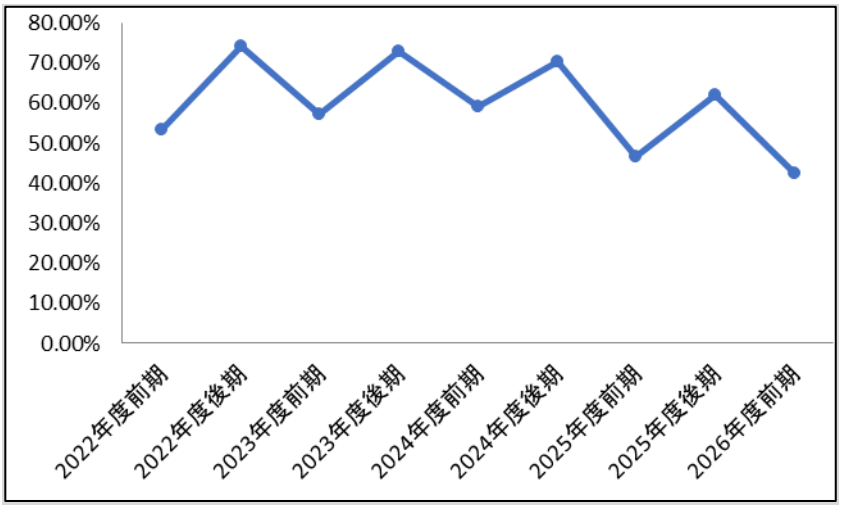



**図1 ライティング・ラボ学期別稼働率の推移**

**表 1 利用数、設置セッション数、セッション稼働率、利用数前年同期比の推移**

| 年度 | 前期・後期 | 利用数 | 開室日数 | 設置数 | 稼働率 | 利用数前年同期比 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2021 | 前期 | 425 | 70 | 852 | 49.88% | 329.46% |
| | 後期 | 635 | 72 | 916 | 69.32% | 178.87% |
| 2022 | 前期 | 408 | 73 | 771 | 53.44% | 96% |
| | 後期 | 698 | 75 | 954 | 74.11% | 109.92% |
| 2023 | 前期 | 441 | 75 | 783 | 57.09% | 108.09% |
| | 後期 | 772 | 75 | 1067 | 73.10% | 110.60% |
| 2024 | 前期 | 554 | 75 | 950 | 59.16% | 125.62% |
| | 後期 | 787 | 74 | 1137 | 70.36% | 101.94% |
| 2025 | 前期 | 375 | 75 | 819 | 46.64% | 67.69% |
| | 後期 | 650 | 77 | 7071 | 62% | 82.59% |
| 2026 | 前期 | 335 | 75 | 796 | 42.46% | 89.33% |

[3] SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。また、No Show（予約はしたものの来室せず）については、実施扱いで稼働率を算出した。実際のセッションは 335 回であるが、稼働率の計算に関しては、セッション数は 338 回としている。

2026 年度前期のセッションの稼働実態について、週ごとの設置数・稼働数の推移を図 2 に、週ごとの稼働率の推移を図 3 に、週別・曜日別のセッション数と稼働率を表 2 および表 3 に示す。

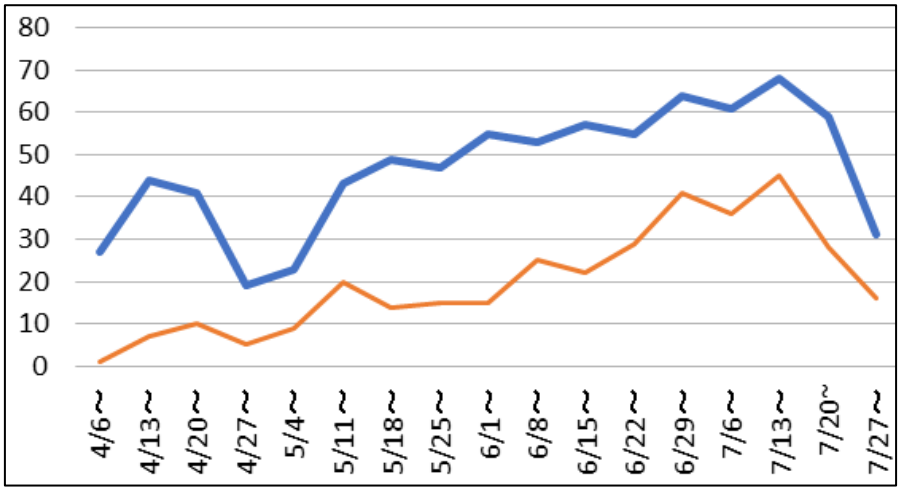



**図2　2026 年度前期週別セッション設置数・稼働数の推移**

（青色：設置数、橙：稼働数）

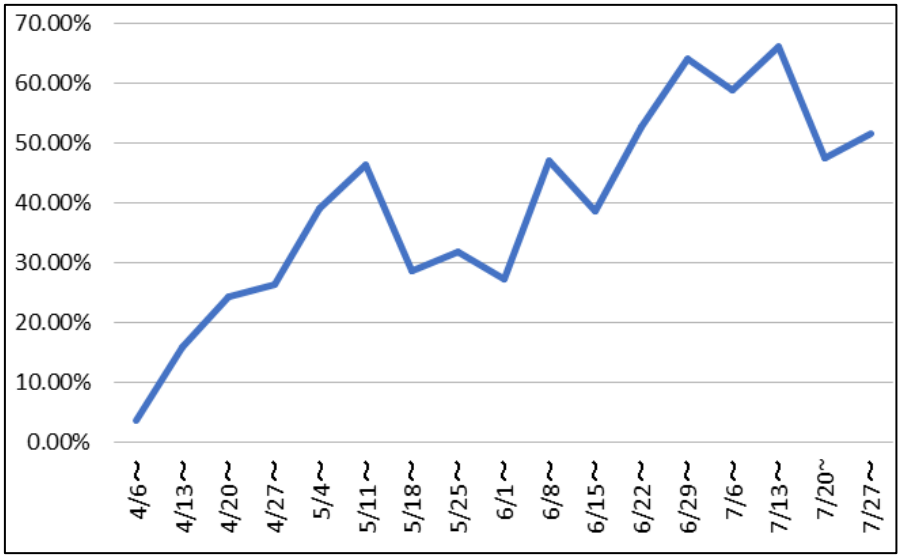



**図3　2026 年度前期週別セッション稼働率の推移**

**表 2 週別・曜日別セッション数・稼働率（4 月第 2 週～6 月第 1 週）**

| | | 4/6～ | 4/13～ | 4/20～ | 4/27～ | 5/4～ | 5/11～ | 5/18～ | 5/25～ | 6/1～ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 月 | 設置数 | | 14 | 16 | 14 | | 14 | 16 | 19 | 16 |
| | 稼働数 | | 2 | 2 | 1 | | 6 | 3 | 7 | 5 |
| | 稼働率 | | 14.29% | 12.50% | 7.14% | | 42.86% | 18.75% | 36.84% | 31.25% |
| 火 | 設置数 | | 0 | 0 | 0 | | 3 | 4 | 4 | 5 |
| | 稼働数 | | 0 | 0 | 0 | | 3 | 4 | 4 | 1 |
| | 稼働率 | | | | | | 100.00% | 100.00% | 100.00% | 20.00% |
| 水 | 設置数 | | 4 | 4 | 5 | | 4 | 3 | 3 | 8 |
| | 稼働数 | | 1 | 4 | 4 | | 0 | 2 | 0 | 3 |
| | 稼働率 | | 25.00% | 100.00% | 80.00% | | 0.00% | 66.67% | 0.00% | 37.50% |
| 木 | 設置数 | 12 | 11 | 10 | | 13 | 10 | 11 | 8 | 11 |
| | 稼働数 | 1 | 4 | 3 | | 6 | 6 | 2 | 4 | 4 |
| | 稼働率 | 8.33% | 36.36% | 30.00% | | 46.15% | 60.00% | 18.18% | 50.00% | 36.36% |
| 金 | 設置数 | 15 | 15 | 11 | | 10 | 12 | 15 | 13 | 15 |
| | 稼働数 | 0 | 0 | 1 | | 3 | 5 | 3 | 0 | 2 |
| | 稼働率 | 0.00% | 0.00% | 9.09% | | 30.00% | 41.67% | 20.00% | 0.00% | 13.33% |
| 計 | 設置数 | 27 | 44 | 41 | 19 | 23 | 43 | 49 | 47 | 55 |
| | 稼働数 | 1 | 7 | 10 | 5 | 9 | 20 | 14 | 15 | 15 |
| | 稼働率 | 3.70% | 15.91% | 24.39% | 26.32% | 39.13% | 46.51% | 28.57% | 31.91% | 27.27% |

**表 3 週別・曜日別セッション数・稼働率（6 月第 2 週～7 月第 5 週）**

| | | 6/8～ | 6/15～ | 6/22～ | 6/29～ | 7/6～ | 7/13～ | 7/20~ | 7/27～ | 前期全体 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 月 | 設置数 | 14 | 15 | 14 | 16 | 19 | 17 | 17 | 17 | 238 |
| | 稼働数 | 3 | 9 | 8 | 9 | 14 | 10 | 8 | 10 | 97 |
| | 稼働率 | 21.43% | 60.00% | 57.14% | 56.25% | 73.68% | 58.82% | 47.06% | 58.82% | 40.76% |
| 火 | 設置数 | 6 | 7 | 6 | 9 | 6 | 12 | 6 | 6 | 74 |
| | 稼働数 | 6 | 6 | 5 | 8 | 4 | 12 | 4 | 4 | 61 |
| | 稼働率 | 100.00% | 85.71% | 83.33% | 88.89% | 66.67% | 100.00% | 66.67% | 66.67% | 82.43% |
| 水 | 設置数 | 8 | 8 | 8 | 9 | 10 | 10 | 8 | 8 | 100 |
| | 稼働数 | 4 | 4 | 5 | 4 | 7 | 7 | 4 | 2 | 51 |
| | 稼働率 | 50.00% | 50.00% | 62.50% | 44.44% | 70.00% | 70.00% | 50.00% | 25.00% | 51.00% |
| 木 | 設置数 | 11 | 12 | 12 | 17 | 11 | 14 | 16 | | 179 |
| | 稼働数 | 7 | 1 | 4 | 11 | 5 | 7 | 7 | | 72 |
| | 稼働率 | 63.64% | 8.33% | 33.33% | 64.71% | 45.45% | 50.00% | 43.75% | | 40.22% |
| 金 | 設置数 | 14 | 15 | 15 | 13 | 15 | 15 | 12 | | 205 |
| | 稼働数 | 5 | 2 | 7 | 9 | 6 | 9 | 5 | | 57 |
| | 稼働率 | 35.71% | 13.33% | 46.67% | 69.23% | 40.00% | 60.00% | 41.67% | | 27.80% |
| 計 | 設置数 | 53 | 57 | 55 | 64 | 61 | 68 | 59 | 31 | 796 |
| | 稼働数 | 25 | 22 | 29 | 41 | 36 | 45 | 28 | 16 | 338 |
| | 稼働率 | 47.17% | 38.60% | 52.73% | 64.06% | 59.02% | 66.18% | 47.46% | 51.61% | 42.46% |

【所見】

前期のセッション数は前年比で 40 件減少したものの、6 月の利用数に限ってみると、前年同期比で 32 件増加した。一方、従来は繁忙期であった 7 月 20 日から 24 日の週は、前年同期と比べて 39 件減少した。

6 月の利用増加については、4・5 月に実施した見学ツアーや出張ガイダンスをきっかけに、教員からラボの利用を推奨された学生が、例年より早い時期からセッションを利用したことが一因と考えられる。一方、例年利用が集中していた学期末の利用が減少した背景には、生成系 AI の普及により、課題提出の締め切り間際に学生が文章作成や修正を生成系 AI のみで行うケースが増えている可能性も考えられる。ただし、現時点では両者の因果関係を直接確認することはできないため、今後も、学内のニーズおよび利用状況の把握に努めたい。

## Ⅰ-4 利用学生の内訳

＊利用学生数（延べ）[4]　合計 335 件（前年同期 375 件）
＊初来室数　108 名（前年同期 148 名）。そのうち留学生の初来室は 25 名（前年同期 19 名）
＊利用学生の所属と学年を示した表（表 4、表 5、表 6、表 7）以下に示す。なお、表の（）内は前年度同期の人数を示している。

**表 4 利用した学部生の所属と学年**

| 学部全体(所属/学年) | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 5 年～ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 法学部 | 23(24) | 11(8) | 9(7) | 9(1) | 0(3) | 52(43) |
| 経済学部 | 2(2) | 0(5) | 5(3) | 7(10) | 0(0) | 14(20) |
| 商学部 | 11(2) | 0(4) | 0(5) | 6(16) | 0(0) | 17(27) |
| 理工学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 文学部 | 35(71) | 12(24) | 8(1) | 28(47) | 0(4) | 83(147) |
| 総合政策学部 | 10(11) | 1(12) | 15(14) | 1(3) | 0(0) | 27(40) |
| 国際経営学部 | 21(2) | 4(1) | 4(4) | 26(11) | 6(0) | 61(18) |
| 国際情報学部 | 1(2) | 0(1) | 0(0) | 7(0) | 0(0) | 8(3) |
| 法学部通信教育課程 | | | | | | 1(2) |
| 聴講生 | | | | | | 0(0) |
| 科目等履修生 | | | | | | 0(0) |
| 計 | 103(114) | 28(55) | 41(34) | 84(88) | 6(7) | 263(300) |

**表 5 利用した学部留学生の所属と学年（ ）内は前年同期**

| 学部留学生(所属/学年) | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 5 年～ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 法学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 経済学部 | 1(1) | 0(1) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 1(2) |
| 商学部 | 6(0) | 0(0) | 0(1) | 2(0) | 0(0) | 8(1) |
| 理工学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 文学部 | 5(4) | 0(0) | 2(0) | 6(1) | 0(0) | 13(5) |
| 総合政策学部 | 2(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 2(0) |
| 国際経営学部 | 3(0) | 0(0) | 0(0) | 19(0) | 0(0) | 22(0) |
| 国際情報学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 法学部通信教育課程 | | | | | | 0(0) |
| 聴講生 | | | | | | 0(0) |

[4] 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 科目等履修生 | | | | | | 0(0) |
| 計 | 17(5) | 0(1) | 2(1) | 27(1) | 0(0) | 46(8) |

**表 6 利用した大学院生の所属と課程**

| 大学院全体(所属/課程) | 前期課程 | 後期課程 | 計 |
|---|---|---|---|
| 法学研究科 | 7(5) | 27(16) | 34(21) |
| 経済学研究科 | 2(3) | 0(5) | 2(8) |
| 商学研究科 | 16(16) | 0(7) | 16(23) |
| 理工学研究科 | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 文学研究科 | 18(7) | 2(16) | 20(23) |
| 総合政策／公共政策研究科 | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| ビジネススクール | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 計 | 43(31) | 29(44) | 72(75) |

**表 7 利用した大学院留学生の所属と課程**

| 大学院留学生(所属/課程) | 前期課程 | 後期課程 | 計 |
|---|---|---|---|
| 法学研究科 | 1(5) | 27(16) | 28(21) |
| 経済学研究科 | 2(3) | 0(0) | 2(3) |
| 商学研究科 | 16(16) | 0(7) | 16(23) |
| 理工学研究科 | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 文学研究科 | 8(6) | 0(0) | 8(6) |
| 総合政策／公共政策研究科 | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| ビジネススクール | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 計 | 27(30) | 27(23) | 54(53) |

【所見】

学部別の利用状況を見ると、文学部の利用者数の減少が顕著であった。一方、利用者数が増加した学部としては国際経営学部が挙げられ、日本人学生・留学生のいずれも利用が増加した。国際経営学部の学生からは、「授業でフォレストゲートウェイ棟に来た際に、ライティング・ラボが目に入った」という声が聞かれた。国際経営学部ではフォレストゲートウェイ棟で授業が行われる機会が多く、学生がラボの存在を認知しやすいことが、利用者数の増加につながったと考えられる。

このことから、今後はフォレストゲートウェイ棟を利用する機会の少ない学生や、多摩キャンパス以外のキャンパスに在籍する学生にもライティング・ラボの存在や支援内容を知ってもらえるよう、対象に応じた広報方法を検討していきたい。

### Ⅰ-5 相談文章の種類 （ ）内は留学生の人数

授業のレポート　174 件（40 件）
授業の発表資料　24 件（0 件）
研究計画書　14 件（5 件）
卒業論文　57 件（25 件）
修士論文　6 件（2 件）
博士論文　1 件（0 件）

投稿論文・研究ノート　25 件（23 件）
学外での発表資料　1 件（1 件）
学振　13 件(4 件)
その他　20 件（0 件）

【所見】
学振の申請書に関するセッションは延べ 13 件であった。これは春季休暇中に実施した「学振道場」の影響によるものと考えられる。このことから、対象や目的を明確にした企画を実施することで、ライティング・ラボで受けられる支援の具体的なイメージを学生に持ってもらい、セッションの利用促進につなげられる可能性が示唆される。今後は、「発表資料」や「研究計画書」など、特定の成果物や目的に焦点を当てた企画の実施を検討したい。

## Ⅰ-6 昼開室

昼休みセッションに対するニーズを調査するため、今年度から昼休みセッションを実施した。担当するチューターは他のセッション時間で休憩をとり、セッションの設置数に変更はないため、通常開室の実施数／率には、昼開室のものも含まれている。

・開室日程：4/17 以降の月曜日と金曜日（計 27 日間）
・セッション時間：12:40～13:10
・利用学生数：13名

【所見】
昼休みセッションを実施した 27 日間のうち、13 名の学生が利用しており、一定の需要があることが確認された。そのため、来学期以降も昼休みセッションを継続し、学生のニーズに応えていきたい。

## Ⅰ-7 土曜開室

土曜日のセッションに対するニーズを調査するため、今年度は7月の土曜日に開室を行った。セッションは SV と ASV とチューターで担当した。また、全てオンラインでの開室とした。

・開室日時：7/11(10:50～14:50) 利用数 0
7/18(14:10～17:40) 利用数 7
7/25(10:50～16:30) 利用数 5
・3日間での設置数は 15、稼働率は 80.0%
・利用学生数：12 名
・初来室数 7 名（留学生 3 名）

・利用した学部生の所属と学年 （ ）内は留学生の数
法学部1年4名(0名)
法学部3年1名(0名)
経済学部4年1名(1 名)
文学部4年1名(0名)
国際経営学部3年1名(0名)
商学研究科博士前期4名(4 名)

・相談文章の種類 （ ）内は留学生の数
授業のレポート　　11 件（4 件）
授業の発表資料　　1 件（1 件）

・ライティング・ラボを知ったきっかけ （ ）内は留学生の数
授業で知った／先生にすすめられた　　6 件（2 件）
レポートの書き方資料で知った　　1 件（0 件）
ラボのイベント（講座など）で知った　　1 件（1 件）

【所見】
7 月前半は、多くの学生が期末試験に向けた学修に取り組み、学期末レポートに着手する前の時期であったと考えられる。そのため、土曜日の利用者は 7 月第 2 週には 0 名であった一方、第 3･4 週に集中したと考えられる。こうした今年度の利用状況を踏まえ、来年度は 7 月後半に土曜日開室を 2 回実施することを検討したい。
一方、後期の土曜日開室については、学部によって卒業論文の提出締め切りが異なるため、特定の時期に開室した場合、一部の学部の学生にのみ利用上のメリットが生じる可能性がある。以上を踏まえ、後期の土曜日開室については、今年度は実施を見送ることとしたい。

## Ⅰ-8 春期開室

春季休業期間の開室は、前年度の利用数を鑑み、週に1回のペースで実施した。開室日が少ないため、セッション利用率ではなく、利用数のみ示す。なお、セッションは、SV/ASVが担当した。

・開室日程 2/10、17、3/3,17,24,31（計 6 日間）
・開室時間：13:20～16:40
・初来室数 4 名（留学生 0 名）
・実施セッション数：19 件（うち対面 8 件、オンライン 11 件）
利用学部生の所属と学年を示した表（表 8）を以下に示す。なお、表の（）内は前年度同期の人数を示している。
ただし、学部留学生は利用者がいなかったため、記載しない。(前年度は商学部 4 年に 1 件のみ)
大学院留学生の利用は文学研究科後期課程で 1 件だった。(前年度は法学研究科前期課程 1 件、商学研究科前期課程 4 件)
日本人大学院生の利用は理工学研究科博士前期課程で 3 件だった。(前年度 0 件)

**表 8 利用した学部生の所属と課程**

| 学部全体(所属/学年) | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 5 年～ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 法学部 | 0(4) | 0(1) | 1(2) | 0(0) | 0(0) | 1(7) |
| 経済学部 | 0(0) | 0(1) | 0(3) | 0(0) | 0(0) | 0(4) |
| 商学部 | 0(0) | 0(1) | 0(0) | 0(2) | 0(0) | 0(3) |
| 理工学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 文学部 | 2(8) | 5(1) | 7(5) | 0(3) | 0(0) | 14(17) |
| 総合政策学部 | 0(3) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(3) |
| 国際経営学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国際情報学部 | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 法学部通信教育課程 | | | | | | 0(3) |
| 聴講生 | | | | | | 0(0) |
| 科目等履修生 | | | | | | 0(0) |
| 計 | 2(15) | 5(4) | 8(10) | 0(5) | 0(0) | 15(37) |

・相談文章の種類 ( ) 内は前年度の人数

| | |
|---|---|
| 授業のレポート | 0 件 (16 件) |
| 授業の発表資料 | 0 件 (2 件) |
| 研究計画書 | 7 件 (4 件) |
| 卒業論文 | 0 件 (10 件) |
| 修士論文 | 0 件 (0 件) |
| 博士論文 | 0 件 (0 件) |
| 投稿論文・研究ノート | 0 件 (1 件) |
| 学振 | 3 件(0 件) |
| その他 | 9 件 (8 件) |

・ライティング・ラボを知ったきっかけ ( ) 内は前年度の人数

| | |
|---|---|
| ラボの HP／SNS | 0 件 (4 件) |
| 授業で知った／先生にすすめられた | 2 件 (13 件) |
| 友人／先輩／後輩にすすめられた | 1 件 (2 件) |
| レポートの書き方資料で知った | 1 件 (2 件) |
| 学内のポスターやパンフレットで知った | 0 件 (2 件) |

【所見】

春季休業期間は、利用者数は少ないものの、研究計画書や学振の申請書に関するセッションの利用が一定程度見込まれる。レポート・論文に限らず、研究計画書や学振の申請書など、多様な文章に関するニーズに対応するため、今後も春季休業期間の開室日数は現状を維持しつつ、開室を継続していきたい。

### Ⅰ-9 利用学生のアンケート

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケートに協力してもらった。対面では紙面および Google フォーム、オンラインは Google フォームのみ用いて実施した。今期は対面では 125 通、オンラインでは 23 通を回収した。

利用学生数[5]に対する回収率を前年度と比較する。前年 (2025 年) 度前期の回収率が対面 98.3% (178 通／181 名)、オンラインが 39.1% (54 通／138 名) であったのに対して、今年度の回収率は対面 87.4% (125 通／143 名)、オンライン 21.1% (23 通／109 名) でいずれも下がっていた。より多くの学生の意見を把握し、セッションの質のさらなる向上につなげるため、セッション終了後の声掛けを徹底するなど、回答率の向上に努めたい。

アンケートの質問項目と集計結果について、以下に示していく。

[5] セッション件数から、同一学生の同一日利用および連続セッションを除いた人数。

**ライティング・ラボを知ったきっかけ**

回答の重複を避けるため、ライティング・ラボを知ったきっかけについては、予約フォームにて初回利用の学生に限定してたずねた。回答件数と割合を表 9 にまとめた。

**表9 ライティング・ラボを知ったきっかけ（複数回答可）**

| きっかけ | 全体の件数（%） | うち留学生の件数（%） |
|---|---|---|
| ラボの HP／SNS | 12<br>（8.4） | 0<br>（0.0） |
| 授業で知った／先生にすすめられた | 80<br>（55.9） | 21<br>（75.0） |
| 友人／先輩／後輩にすすめられた | 16<br>（11.2） | 4<br>（14.3） |
| レポートの書き方資料で知った | 14<br>（9.8） | 2<br>（7.1） |
| 学内のポスターやパンフレットで知った | 13<br>（9.1） | 1<br>（3.6） |
| ラボのイベント（講座など）で知った | 2<br>（1.4） | 0<br>（0.0） |
| 入学時のガイダンス／資料で知った | 3<br>（2.1） | 0<br>（0.0） |
| その他 | 3<br>（2.1） | 0<br>（0.0） |
| 計 | 143<br>（100.0） | 28<br>（100.0） |

【所見】

これまでと同様、ラボを知ったきっかけで最も多かったのは「授業で知った/先生にすすめられた」であった。また、前年度と比較すると、「友人/先輩/後輩にすすめられた」、「レポートの書き方資料で知った」の割合が増えていた。今年度は出張ガイダンスや見学ツアーの依頼が多く、そこでレポートの書き方資料を配布しているため、その影響もあると考えられる。普段、フォレストゲートウェイを利用しない学生は、まずラボに赴くことにハードルを感じることも少なくないだろう。出張ガイダンス等を実施してラボがどのような場所か知ってもらう、知人に紹介してもらうことで、利用に至るまでのハードルを下げ、学生が自ら書く力を向上させていきたい。

その他の回答として、「Temico で知った」、「中杉出身だから」があった。今年度は中大附属高校でも、実験的にセッションを実施した。こうした高大連携活動も、入学後の学生の積極的なラボ利用につながると考えられる。土曜開室や昼休みセッションなど、今年度から実施した新たな取り組みを今後も検討し、より多くの学生の利用につなげていきたい。

**セッションは有益であったか[6]**

ここからはセッション後のアンケートの回答をまとめていく。比較として、表には前年（2025 年）度前期の回答も併記した。まず、セッションが有益であったかどうかに対する回答人数と割合を、セッション形式別に表 10 にまとめた。

**表 10 セッションは有益であったか**

| 回答項目 | 今年度の回答人数（%） | | 前年度の回答人数（%） | |
|---|---|---|---|---|
| | 対面 | オンライン | 対面 | オンライン |
| 有益ではなかった | 0<br>（0.0） | 0<br>（0.0） | 0<br>（0.0） | 0<br>（0.0） |
| あまり有益ではなかった | 0<br>（0.0） | 2<br>（8.7） | 0<br>（0.0） | 2<br>（3.7） |
| どちらともいえない | 2<br>（1.6） | 0<br>（0.0） | 1<br>（0.6） | 0<br>（0.0） |
| 有益であった | 23<br>（18.4） | 2<br>（8.7） | 31<br>（17.4） | 13<br>（24.1） |
| とても有益であった | 100<br>（80.0） | 19<br>（82.6） | 146<br>（82.0） | 39<br>（72.2） |
| 計 | 125<br>（100.0） | 23<br>（100.0） | 178<br>（100.0） | 54<br>（100.0） |

【所見】

セッションについて、対面とオンラインともに 8 割以上の学生が「有益であった」「とても有益であった」と回答していた。とくにオンラインセッションでは、「とても有益であった」という回答が前年度は 72.2%であったのに対して、今年度は 82.6%に上昇していた。

一方、対面で「どちらともいえない」、オンラインで「あまり有益ではなかった」がそれぞれ 2 件見られた。対面のセッションについて、1 件目はチューターが構成等ハイオーダーに課題点を見出していたが、学生は「学術的表現に関するアドバイスがもっと欲しかったと思いました」と回答していた。チューターと学生で検討したい観点にずれがあったことが推測される。2 件目は、セッションを新人チューターが担当しており、補佐にシニアチューターが入っていた。新人チューターがセッションの進め方を確認するためにシニアチューターに学生の文章を見せていたが、学生はレポートの書き方に慣れておらず、不安感が高かったため、自分の上手く書けていない文章を周りに晒されたように感じたという旨を述べていた。どちらも、チューターと学生間のコミュニケーション不足によって生じた問題だと言える。とくに大学 1 年生は、レポートの書き方に慣れておらず、チューター（大学院生）も大学教員に近しい存在に感じて、萎縮して意見や考えを上手く言えない者もいるだろう。学生のレポートに対する不安を解消し、自信を身に付けさせるには、チューター側の声掛けの工夫や話しやすい雰囲気づくりが肝要である。より学生の立場を意識した新人研修やチューター研修を行い改善していきたい。

オンラインの「あまり有益ではなかった」という回答について、1 件目は理由が書かれていないものの、セッション時間を「短かった」、セッションで困った点で「文章やデータの事前共有が大変だった」「どのように操作すればよいのかわからず不安だった」を選択していた。このことから、Teams でのセッションのセッティングに時間がかかり、十

6「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「どちらともいえない」「有益であった」「とても有益であった」の 5 段階評価。

分なセッションができなかったと学生は感じたのではないかと考えられる。2 件目は、セッション内にて学生が教員や事務室への不満を述べており、チューターが対応に苦慮したケースであった。このような相談については、今後は他の支援機関との連携も図れるよう検討し、大学全体で対応できるようにしていくことが望ましいだろう。

セッションが有益であると感じた理由から、先述したように学生もチューターとのやり取りを重視していることが分かる。例えば、「言いたいことを丁寧に汲み取っていただき、上手く文章に落とし込むことができたから」とあるように、まとまっていない考えを、チューターからの支援によって文章化できたことが示されている。留学生からも、「慣れていない日本語で、たどたどしくなっても丁寧な対応で、明確に自分が何をすればいいのかが分かった」という回答がされており、チューターが主導するのではなく、学生の話を傾聴し、主体的な書き手としての力を伸ばそうとしていることが窺える。また、「自分では思いつかなかった視点から、自分の作ったパワーポイントの修正点を知れた」、「自分では気づくことのできない矛盾に気づくことができた」等、専門外の人間と文章を検討する意義に対する気づきも見られていた。今後も、チューター研修を重ね、多くの学生とコミュニケーションを十分に取り、信頼関係を構築し、より良いセッションを行えるようにしていきたい。加えて、ホームページや SNS の更新等広報活動を通して、学生にラボの理念や利用する意義を発信し、周知させていきたい。

**セッションの時間[7]**

次に、セッションの時間についてどう感じたかについての回答人数と割合を表 11 に示した。

**表 11 セッションの時間についてどう感じたか**

| 回答項目 | 今年度の回答人数(%) | | 前年度の回答人数(%) | |
|---|---|---|---|---|
| | 対面 | オンライン | 対面 | オンライン |
| 短かった | 6<br>(4.8) | 1<br>(4.3) | 5<br>(2.8) | 0<br>(0.0) |
| 少し短かった | 18<br>(14.4) | 4<br>(17.4) | 21<br>(11.8) | 14<br>(25.9) |
| 妥当だった、ちょうどよかった | 100<br>(80.0) | 16<br>(69.6) | 151<br>(84.8) | 38<br>(70.4) |
| 少し長かった | 1<br>(0.8) | 1<br>(4.3) | 1<br>(0.6) | 1<br>(1.9) |
| 長かった | 0<br>(0.0) | 1<br>(4.3) | 0<br>(0.0) | 1<br>(1.9) |
| 計 | 125<br>(100.0) | 23<br>(100.0) | 178<br>(100.0) | 54<br>(100.0) |

【所見】

対面・オンラインセッションともに大半の学生はセッション時間を妥当であると回答していた一方、前年度に比べ「短かった」という回答が若干増えていた。今年度は、文章の共有方法が Google ドキュメントから OneDrive に移行し、オンラインセッションが大学側の方針の影響で Teams に切り替えられた。チューター・学生ともにセッションのセッティングに手間取って、相対的にセッション時間そのものが短く感じられたのかもしれない。加えて、今年度は試験的にお昼休みセッションを実施した。2 限と 3 限に授業があり、その合間を縫ってセッションを受けた学生もおり、移動の分セッション時間が本来よりも短くなった可能性もある。今後もチューター研修を実施し、限られた時間で十

7 「短かった」「少し短かった」「妥当だった、ちょうどよかった」「少し長かった」「長かった」の 5 段階評価。

分な検討ができるよう、セッションの質の向上をはかりたい。

**対面セッションの良かった点と困った点**

セッションの良かった点/困った点について、セッション形式別にたずね、表にまとめた。まず、表12に対面セッションの良かった点、表13に対面セッションで困った点の回答件数と割合を示した。

**表12 対面セッションの良かった点（複数回答可）**

| 回答項目 | 今年度の回答件数（%） | 前年度の回答件数（%） |
|---|---|---|
| 場所がわかりやすかった | 37（14.7） | 53（15.0） |
| セッションブースなどの環境が整っていた | 64（25.5） | 84（23.7） |
| 文章の共有が楽だった | 49（19.5） | 84（23.7） |
| チューターとの意思疎通がしやすかった | 98（39.0） | 125（35.3） |
| その他 | 3（1.2） | 4（1.1） |
| 回答なし | 0（0.0） | 4（1.1） |
| 計 | 251（100.0） | 354（100.0） |

**表13 対面セッションで困った点（複数回答可）**

| 回答項目 | 今年度の回答件数（%） | 前年度の回答件数（%） |
|---|---|---|
| 場所がわかりにくかった | 15（11.8） | 37（20.6） |
| セッションブースなどの環境整備に問題がある | 1（0.8） | 1（0.6） |
| 文章共有の準備に手間取った | 9（7.1） | 11（6.1） |
| チューターとの意思疎通が難しかった | 5（3.9） | 2（1.1） |
| その他 | 20（15.7） | 20（11.1） |

| | | |
|---|---|---|
| 回答なし | 77<br>(60.6) | 109<br>(60.6) |
| 計 | 127<br>(100.0) | 180<br>(100.0) |

**オンラインセッションの良かった点と困った点**

次にオンラインセッションについて、表 14 にオンラインセッションの良かった点、表 15 にオンラインセッションで困った点の回答件数と割合を示した。

**表 14 オンラインセッションの良かった点(複数回答可)**

| 回答項目 | 今年度の回答件数<br>(%) | 前年度の回答件数<br>(%) |
|---|---|---|
| 移動の手間が省けた | 15<br>(37.5) | 44<br>(45.8) |
| 文章やデータの事前共有が楽だった | 12<br>(30.0) | 32<br>(33.3) |
| 対面とは異なり緊張せずに済んだ | 10<br>(25.0) | 14<br>(14.6) |
| 特になし | 2<br>(5.0) | 4<br>(4.2) |
| その他 | 3<br>(7.5) | 2<br>(2.1) |
| 計 | 40<br>(100.0) | 96<br>(100.0) |

**表 15 オンラインセッションで困った点(複数回答可)**

| 回答項目 | 今年度の回答件数<br>(%) | 前年度の回答件数<br>(%) |
|---|---|---|
| 場所の確保が難しかった | 0<br>(0.0) | 2<br>(3.5) |
| 文章やデータの事前共有が大変だった | 4<br>(17.4) | 1<br>(1.8) |
| どのように操作すればよいのかわからず不安だった | 1<br>(4.3) | 5<br>(8.8) |
| チューターの声が聞き取りづらいときがあった | 2<br>(8.7) | 6<br>(10.5) |

| | | |
|---|---|---|
| 特になし | 11<br>(47.8) | 42<br>(73.7) |
| その他 | 5<br>(21.7) | 1<br>(1.8) |
| 計 | 23<br>(100.0) | 57<br>(100.0) |

【所見】

対面セッションについて、「チューターとの意思疎通がしやすかった」ことが良かった点として最も多く選択されており、前年度より割合も高くなっていた。一方で、「チューターとの意思疎通が難しかった」ことを困った点として回答していた割合は前年度よりやや高かった。前期は初めて利用する学生も多いため、誰でも意見や考えを述べやすい雰囲気づくりをしていくことが求められると言えよう。その他、対面セッションの困った点として、「場所がわかりにくかった」という回答は前年度より割合がかなり低くなっていた。春のポスターでマップを掲載し、ホームページに経路を掲載している他、今年度は見学ツアーが多く、一度ラボまで訪れたことのある学生もいたことが影響していると考えられる。

オンラインセッションの良かった点として、「対面とは異なり緊張せずに済んだ」ことが前年度より多く選択されていた。上述したように初めて利用する学生が多いため、直接顔を合わせないほうが話しやすい側面があったのだろう。困った点としては、今年度からセッション方法や共有方法が変更されたことが影響してか、「文章やデータの事前共有が大変だった」という回答の割合が高くなっていた。その他の回答でも、「OneDrive で文章を共有した場合に、脚注の修正はとっても難しいです。脚注は全部隠れてしまい、読みづらいです。」、「チームズに上手くログインできなかった」と述べられていた。チューター研修で新規の方法の確認、検討を行い、スムーズなセッションを行えるようにしていきたい。

**より良いライティング・ラボにするためのアドバイス**

最後に、より良いライティング・ラボにするためのアドバイスを自由記述（任意）で回答を求めた。以下、自由記述部分に関する所見を述べる。

前年度まではセッション時間の延長やセッション日の増加の要望が複数見られたが、今年度は土曜日開室や昼休みセッションの導入の効果か、セッション時間の延長の希望が 1 件のみであった。後期は卒業論文や修士論文の提出時期になり、セッション時間の延長は前期よりも難しい。学生の要望に「自分が送ったレポートをどれくらい読んでいただいているかわからなかったのでそれを知った上で話ができたらよりよいと思います。」とあるように、開始時に今回のセッションで検討したい箇所を明示するなど、学生とのコミュニケーションを密に行い、充足感を高めていきたい。

ラボの利用に関する要望として、ラボの場所がわかりにくいことが挙がっていた。フォレストゲートウェイ内では壁に掲示物を貼り付けることができないため、ホームページに経路が掲載されていることを周知させていく必要があるだろう。さらに、ラボの存在自体知らないという学生がまだ多いということで、今後も広報活動に力を入れていきたい。

ラボで改善していくというよりは、大学または学部での改善が必要と思われる意見も見られた。「学部ごとに支援体制に格差があり、つらいですね。法律論文の技法等を体系的・論理的に教えていただけると有難いです。」とあり、対面セッションの困った点のその他として、「茗荷谷棟に拠点がない」と述べていた学生もいた。ラボはアカデミック・ライティングの観点からレポート・論文を検討する場所であり、専門的な内容は教員が指導するものである。ラボで何を検討できるのかも含めて学生に広く伝えていくことに加え、茗荷谷キャンパスにおける専門内容に対する支援体制の強化を大

学側が検討していくことが望ましいだろう。

その他、「ライティング・ラボの室内が暗いのでもっと明るくしてほしい。」という要望があったが、これは照明の問題というよりは、ゲリラ豪雨によって急に外が暗くなったことが影響していると推測される。

対面・オンラインどちらも全体的には現状に不満がないこと、もしくは感謝の表明が多かった。今後もより多くの学生が有益な時間を得られるよう、ラボの環境を改善し、セッションの質をさらに向上させていきたい。

**補足：土曜開室利用学生のアンケート回答まとめ**

学生からの要望を受け、今年度は 7 月 11 日、18 日、25 日に試験的に土曜開室をオンラインで実施した。土曜開室を利用した学生のアンケートの回答を、通常開室でオンラインセッションを利用した学生の回答と比較した。ただし、土曜開室におけるアンケートの回答者は 5 名と少数のため、あくまで参考程度に留めておきたい。

**セッションは有益であったか[8]**

表16に、土曜開室及び通常開室（オンライン）においてセッションが有益であったかどうかに対する回答人数と割合を示した。

**表 16 セッションは有益であったか**

| 回答項目 | 回答人数（%） | |
|---|---|---|
| | 土曜開室 | 通常開室 |
| 有益ではなかった | 0<br>（0.0） | 0<br>（0.0） |
| あまり有益ではなかった | 0<br>（0.0） | 2<br>（8.7） |
| どちらともいえない | 0<br>（0.0） | 0<br>（0.0） |
| 有益であった | 2<br>（40.4） | 2<br>（8.7） |
| とても有益であった | 3<br>（60.0） | 19<br>（82.6） |
| 計 | 5<br>（100.0） | 23<br>（100.0） |

【所見】

土曜開室を利用した回答者は、全員が「有益であった」「とても有益であった」と回答していた。セッションを有益だと感じた理由から、レポートの書き方や引用の仕方などを相談する学生が多かったことが読み取れる。I -7 土曜

[8]「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「どちらともいえない」「有益であった」「とても有益であった」の 5 段階評価。

開室の内訳から、初回利用が 12 名中 7 名であった。また、1 年生が 4 名、法学部の学生が 5 名おり、初めてレポートを書く学生や、他のキャンパスにいて平日にラボを利用しにくい学生に需要があったのではないかと推測される。

**セッションの時間**[9]

次に、セッションの時間についてどう感じたかについての土曜開室と通常開室の回答人数と割合を表 17 に示した。

**表 17 セッションの時間についてどう感じたか**

| 回答項目 | 回答人数(%) | |
|---|---|---|
| | 土曜開室 | 通常開室 |
| 短かった | 0<br>(0.0) | 1<br>(4.3) |
| 少し短かった | 1<br>(20.0) | 4<br>(17.4) |
| 妥当だった、ちょうどよかった | 4<br>(80.0) | 16<br>(69.6) |
| 少し長かった | 0<br>(0.0) | 1<br>(4.3) |
| 長かった | 0<br>(0.0) | 1<br>(4.3) |
| 計 | 5<br>(100.0) | 23<br>(100.0) |

【所見】

人数が少ないため参考程度ではあるものの、土曜開室の学生の多くが「妥当だった」と回答していた。平日の通常開室と比べ、土曜日は授業がないもしくは少ないため、セッション前後の授業の時間を気にすることなく、余裕をもってセッションを受けることができていた可能性がある。

**セッションの良かった点と困った点**

土曜開室及び通常開室におけるオンラインセッションについて、表 18 にセッションの良かった点、表 19 に困った点の回答件数と割合を示した。

**表 18 オンラインセッションの良かった点(複数回答可)**

| 回答項目 | 土曜開室の回答件数<br>(%) | 通常開室の回答件数<br>(%) |
|---|---|---|
| 移動の手間が省けた | 4<br>(44.4) | 15<br>(37.5) |

[9] 「短かった」「少し短かった」「妥当だった、ちょうどよかった」「少し長かった」「長かった」の 5 段階評価。

| | | |
|---|---|---|
| 文章やデータの事前共有が楽だった | 1<br>(11.1) | 12<br>(30.0) |
| 対面とは異なり緊張せずに済んだ | 3<br>(33.3) | 10<br>(25.0) |
| 特になし | 1<br>(11.1) | 2<br>(5.0) |
| その他 | 0<br>(0.0) | 3<br>(7.5) |
| 計 | 9<br>(100.0) | 40<br>(100.0) |

**表 19 オンラインセッションで困った点(複数回答可)**

| 回答項目 | 土曜開室の回答件数(%) | 通常開室の回答件数(%) |
|---|---|---|
| 場所の確保が難しかった | 0<br>(0.0) | 0<br>(0.0) |
| 文章やデータの事前共有が大変だった | 1<br>(16.7) | 4<br>(17.4) |
| どのように操作すればよいのかわからず不安だった | 2<br>(33.3) | 1<br>(4.3) |
| チューターの声が聞き取りづらいときがあった | 0<br>(0.0) | 2<br>(8.7) |
| 特になし | 1<br>(16.7) | 11<br>(47.8) |
| その他 | 2<br>(33.3) | 5<br>(21.7) |
| 計 | 6<br>(100.0) | 23<br>(100.0) |

【所見】

通常開室に比べ、「移動の手間が省けた」ことが良かった点として多く選択されていた。休日で、自宅からでも利用できたためであろう。一方、「文章やデータの事前共有が楽だった」は通常開室に比べ割合が低く、セッションで困った点としても「どのように操作すればよいのかわからず不安だった」という回答が相対的に高かった。セッションで困った点のその他の回答としても、「Teams のアプリから入ったのにうまく通信できなかった。おそらく、プライベートのアカウントだったからと思われる」と述べられており、最後のラボに対するアドバイスでも、「zoom の利用でも可能になったらありがたいです」と書かれていた。初回利用の学生が多く、Teams に切り替わったことで、操作に不慣れな学生が多かったのではないか。ホームページに掲載したラボの利用方法を周知させるとともに、今後も土曜開室や昼休みセッションなどを継続して行い、より多くの学生がラボを気軽に利用できるようにしていきたい。

# Ⅱ　セッション以外の活動

## Ⅱ-1　広報活動

### Ⅱ-1-1 出張ガイダンス及び見学ツアーの実施

今期は、出張ガイダンス 29 件、見学ツアー15 件、計 44 件を実施した（前年同時期の実施数は、出張ガイダンス 7 件、見学ツアー7 件）。依頼件数が増加した要因として、教員向け広報の工夫[10]が挙げられる。

今期は、出張ガイダンスにあわせてワンポイント講座[11]の実施を希望するケースが増加し、23 件実施した。ワンポイント講座は原則として出張ガイダンス時のみ実施しているが、少人数の見学ツアーにおいても希望があったため、見学ツアー時にも 2 件実施した。ライティング・ラボの利用促進に向け、来学期以降も可能な限り教員の要望に応じ、出張ガイダンスおよび見学ツアーにあわせてワンポイント講座を実施していきたい。

また、出張ガイダンスおよび見学ツアーの際に、教員から生成系 AI の利用に関するライティング・ラボの対応について説明を求められるケースがあった。ライティング・ラボでは、中央大学が定める考え方に則ったうえで、各教員による生成系 AI の利用に関する指示に従い、執筆支援を行うこととしている旨、説明を行った。

【所見】

出張ガイダンス時に行うワンポイント講座は、学生にとって「アカデミック・ライティングの観点」を知るきっかけとなる。ライティング・ラボの存在が学生に周知されていないという課題に加え、アカデミック・ライティングを知らない学生にとっては、ライティング・ラボでできる支援内容がわからないという点が、利用の壁となっている可能性がある。そこで、来学期も出張ガイダンス時にワンポイント講座を行うことで、ライティング・ラボでできる支援を学生に具体的に周知し、ラボ利用促進につなげたい。

ワンポイント講座の実施数増加に伴い、シニアチューターだけではなく、全チューターがワンポイント講座を担当できるよう準備する必要がある。夏期期間中の集中研修を利用し、誰でもワンポイント講座を担当できるよう準備を進めたい。

生成系 AI に関連する支援については、今後も大学の方針に則ったうえで、各教員の課題ごとの指示に従い支援を行えるようチューター研修でも取り入れていきたい。また、教員に向けて、ライティング・ラボの生成系 AI に対する対応も周知していくことで、教員との連携もとっていきたい。

### Ⅱ-1-2　ワンポイント講座の開催

今年度の新たな取り組みとして、多摩キャンパスにおける対面形式に加え、茗荷谷キャンパスでの開催と Teams による配信を組み合わせたハイブリッド形式で実施した。対面形式とハイブリッド形式を各 1 回実施し、学生が昼食を取りながら気軽に参加できるよう、いずれも昼休みの時間帯に開催した。

対面形式は多摩キャンパス 3 号館で開催したが、3 号館から離れた棟にいる学生にとっては、昼休みの移動が負担となり、参加しづらいという課題があった。次回の開催にあたっては、より多くの学生が参加しやすい場所を検討する必要がある。

ハイブリッド形式で開催した茗荷谷キャンパスには必要な機材が常設されており、準備段階において大きな課題はなかった。一方で、機材の操作には一定の習熟が求められるこ

[10] アカデミック・ライティング部門長による広報と大学院事務室による広報を行った。
[11] ワンポイント講座のテーマは「序論本論結論」または「パラグラフ・ライティング」である。

とから、担当チューターによる事前の動作確認が重要である。また、今回使用した教室は大学院生向けの施設であり、学部生にとってアクセスしやすい環境とは言い難い。次回の開催にあたっては、学部生が通常使用している教室やスチューデント・ハブ等、学部生が利用しやすい施設の活用を検討したい。

参加した学生の所属学部は多岐にわたったが、学部 1 年生の参加が多かった。対面形式と比較すると、ハイブリッド形式ではオンラインでの参加者が多く、多摩キャンパスに在籍する学生の参加も見られた。

来年度の開催に向けては、より多くの学生の参加を促し、ライティング・ラボの利用促進につなげられるよう、テーマや開催方法等について検討していきたい。

日時：

6 月 22 日（月）12:40～13:10　（参加学生 14 名）
6 月 25 日（木）12:40～13:10　（参加学生　対面 6 名　オンライン 25 名）

アンケートは、各回終了時に Google フォームにて実施した。任意でアンケートに協力してもらい、22 名より回収できた。協力者の内訳は、1 回目が 10 名、2 回目が 12 名である。

＊アンケート結果：（合計 22 件）

1. 有益であったかどうか
   - そう思う 16 件
   - ややそう思う 6 件
   - あまりそう思わない 0 件
   - そう思わない 0 件

2. 本日のワンポイント講座を知ったきっかけは何ですか。(上位 3 種)
   - ライティング・ラボによる電子的告知 9 件
   - ポスター・チラシ 8 件
   - 教員・友人からの勧め 4 件

3. これまでにライティング・ラボをご利用したことはありますか。
   - はい 1 件
   - いいえ 21 件

4. 今後、ライティング・ラボを利用したいと思いますか。
   - そう思う 16 件
   - ややそう思う 6 件
   - あまりそう思わない 0 件
   - そう思わない 0 件

5. 今後、ラボ発行の『レポートの書き方資料』を活用したいと思いますか。
そう思う 22 件

6. 学年
学部 1 年生 15 件
学部 2 年生 1 件
学部 3 年生 4 件
学部 4 年生 2 件

7. 所属学部
文学部 11 件
経済学部 5 件
法学部 3 件
総合政策学部 1 件
商学部 1 件
理工学部 1 件

アンケートの集計結果からは、「本日の講座が有益だったか」という設問に対し、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて全員が肯定的に回答しており、参加学生から高い評価を得たことがうかがえる。自由記述においても、Excel でのグラフ・表の作成方法や Word への貼り付け方など、実践的な内容を学べたことに対する満足の声が多く寄せられた。一方で、著作権表示のルールや一次情報の加工方法など、より発展的なテーマを扱ってほしいという要望も見られた。

ライティング・ラボの利用経験がある回答者は 22 名中 1 名にとどまり、「今回の講座でライティング・ラボの存在を知れた」との声があった。また、「利用してみたいと思うもののハードルを感じる」「実際にラボを利用している様子を動画などで紹介してほしい」といった声も寄せられており、ラボの認知度向上に加え、利用開始に対する心理的なハードルを下げるための工夫が引き続き課題であると考えられる。加えて、都心キャンパスに在籍し、多摩キャンパスを訪れる機会が少ない学生からも「機会があれば利用したい」との声が寄せられており、多摩キャンパス以外の学生に対するラボの周知・広報を強化していく必要がある。

開催については、「このような機会を度々開催してほしい」という要望があった一方で、開催時間が他の学内行事と重なったとの指摘もあった。今後の開催にあたっては、他の学内行事との重複を避けるなど、日程調整の際の参考としたい。

### Ⅱ-1-3 学振道場の開催

昨年度に引き続き、学振道場を 3 月 5 日にオンラインで開催した。本企画は、大学院生が学振の申請書を作成する際のスキル向上、大学院生のライティング・ラボ利用促進に加え、専門性の高い文章をセッションで検討するためのチューター自身のスキル向上を目的として実施した。そのため、学振および Spring への応募経験があるチューター2 名を中心に、その他のチューターも準備段階から参加した。

事前の申込者数は 16 名であったが、当日の参加者は 8 名で、全員が日本人大学院生であった。申込者数に対する実参加率の低さ、および留学生の参加がなかったことは、今後の課題として挙げられる。一方で、理工学研究科からも 3 名（全員日本人の大学院生）が参加し、さまざまな分野の大学院生が意見を交わす機会となった。

日時：2026 年 3 月 5 日（木）14:00～16:00
参加者数：8 名 （日本人院生 8 名 留学生院生 0 名）

アンケートは、各回終了時に Google フォームにて実施した。任意でアンケートに協力してもらい、 参加者全員の８名より回収できた。以下に、アンケート結果と参加学生からの主な回答例を示す。

＊アンケート結果：（合計 8 件）
有益であったかどうか
そう思う 6 件
ややそう思う 2 件

有益であったと答えた理由として、「初めてのことばかりで為になった」「自分の中でわかっていたようなところをしっかり振り返った上で意識しようという気持ちになれた」「申請書のブラッシュアップについて着目すべき点をよく理解できた」など、内容に関して肯定的なコメントが多く見られた。また、「とにかくたくさんの人に見てもらうことが大事だと学べたので」「実際に他人の申請書を評価することで、申請書作成の時に注意するべき点がはっきりわかった」「他分野の申請書を読んでみる経験ができた」など他者に自分の文章を読んでもらうことや、他分野の文章に触れることの重要性に気付くコメントも見られた。また、感想の中に「今後はラボを利用し、申請書だけでなく発表用のレジュメも見ていただきたいと思っています」「今回参加して、申請書の書き方だけでなく、ライティング・ラボの雰囲気や使い方などもわかって良かった」など今後の利用につながるコメントも見られた。

前期の学振や spring に関する院生のセッション利用数は、学振に関するセッションが 13 件、spring に関するセッションが 1 件であった。専門性の高い文章に関しても、セッションにおけるフィードバックの観点からの検討が有効だということが「学振道場」を通して理解され、利用につながったと思われる。ターゲットを絞ったイベント開催もラボの周知に一定の効果があるといえる。

今回の参加者は文学・経済学・理工学研究科の日本人院生であった。今後は、今回参加のなかった研究科および留学生への広報を検討していきたい。

【所見】

利用率が減少する中、「ライティング・ラボでできる支援」を学生に周知することが重要な課題といえる。出張ガイダンス時のワンポイント講座や学振道場のように対象者が比較的少ない周知方法と、全学生対象のワンポイント講座など対象者が比較的多い周知方法のいずれも工夫していきたい。また、ポスター掲示に関しては、茗荷谷及び市谷キャンパスはサイネージのみの掲示となる。同時に他のイベントなどの宣伝が行われていると、学生の目に留まりにくくなるという問題があり、サイネージ掲示のみのキャンパ

スではポスターによる宣伝効果があまり望めない。両キャンパスへの広報については、今後も継続して検討していく。

## Ⅱ-2　研修

### Ⅱ-2-1　学期中チューター全体研修

チューターのセッションスキルの向上を目的として、今期も計 5 回の全体研修をオンラインで実施した。曜日ごとに各 1 回の研修を担当し、シニアチューターを中心に、テーマの決定（表 20）、事前課題や当日の進行方法の検討、資料作成等を行った。

**表 20　2026 年度前期チューター全体研修の概要**

| 月日 | 担当 | テーマ |
|---|---|---|
| 4/16 | SV | 諸連絡、Teams 動作確認他 |
| 5/14 | 金曜日チューター | 新人お悩み相談室：アイスブレイクでのコミュニケーションの取り方 |
| 5/28 | 月曜日チューター | 「全体を見てほしい」と言われたときの具体的な目標の立て方 |
| 6/91 | 木曜日チューター | グループセッションの留意点 |
| 6/18 | 水曜日チューター | ワンポイント講座「図表の扱い方」リハーサル |

5 月 14 日は、2 期目のチューターを対象とした悩み相談の場を設けた。学生が安心してチューターとコミュニケーションを取れるよう、セッション開始時に行うアイスブレイクをテーマとした研修を実施した。コミュニケーションスキルだけでなく、学生との関係性を重視する意見も見られ、チューターの役割を再確認する機会となった。

5 月 28 日および 6 月 9 日の研修では、セッションにおける課題を取り上げた。5 月 28 日は、「全体を見てほしい」といった学生の曖昧な要望に対し、具体的なセッションの目標を設定する方法について学んだ。学生主体というライティング・ラボの理念に沿いつつ、学生の要望を具体化する方法についてディスカッションを行った。6 月 9 日は、グループセッションをテーマとした。グループで課題を執筆する際に、学生同士の連携が十分に取れていない場合、チューターがどのような働きかけを行うべきかについてディスカッションを行った。

6 月 18 日は、6 月末に実施したワンポイント講座のリハーサルを行った。

【所見】

今学期は、「セッション利用の目的があいまいな学生」や「グループで連携がとれていない学生」など、文章そのものの問題ではなく、学生が抱える課題に対してセッションでどのように対応するかを研修のテーマとした。学生の書き手としての成長につなげるためには、チューターからの学生への適切な働きかけが重要となる。「書く」こと以外に学生が抱える課題に対して、ライティング・ラボとしてどのような働きかけができるかについて、今後もチューター研修でディスカッションする機会を設けたい。

また、セッション後のアンケート結果からは、学生がチューターとのコミュニケーションを有益なものと捉えていることがうかがえる。学生の立場を意識したコミュニケーションを取ることが、信頼関係の構築やセッションの満足度向上につながっていると考えられる。そのため、チューター研修においては、学生の考えを真摯に聞く姿勢や、学生が書いた文章を的確に診断するスキルの向上にも重点を置き、より質の高いセッションを提供できるようにしていきたい。

## Ⅱ-2-2　新人チューター研修

今期就任した新人チューター3 名を対象に、配属曜日のチューターを中心として、文章診断の練習、セッション見学、セッション計画の作成、模擬セッションの実施等を約 2 か月にわたり行った。

配属曜日のチューターが新人チューター研修に関わることで、チューター同士が互いの経験や知識から学ぶ機会を創出し、学び合う土壌づくりにもつなげている。新人チューターにとっての課題の一つとして、学生との対話が挙げられる。学生の話を丁寧に聞き、効果的な質問を行うためには一定の経験が必要であることから、2 年目以降のチューターの経験から学ぶことは多い。今後も先輩チューターの経験を参考にしながら、セッションスキルの向上に努めることが期待される。

【所見】

学期中のチューター全体研修に関して、担当チューターは準備段階から加わっている。SV/ASV や他のチューターと協働することで、アカデミック・ライティングの観点に対する理解をより深めたり、セッションスキルを高めたりすることにつながる。今後も、研修の準備段階から参加する機会を設けることで、チューター自身の課題を認識し、その課題に取り組む機会としていきたい。

新人チューター研修の一環として、セッション担当開始直後は、シニアチューターとの 2 名体制としている。しかし、今学期は、2 名体制でのセッションが、セッションを受ける学生の負担となっているケースがあった。学部 1 年生で、ライティング・ラボの初回利用というケースであったため、学生にとって不安や負担につながったと考えられる。稼働率が低い時期には、新人チューターが担当できるセッションが限られるという課題がある。こうした状況においても、セッション担当を急ぐのではなく、新人チューターの習熟度を確認しながら、学生への負担にも配慮して研修を進めていきたい。たとえば、新人チューターが担当するセッションでは、ラボを利用した経験のある学生を対象とするなど、学生の不安や負担を軽減するための工夫を行いたい。

## Ⅱ-3　生成系 AI の利用に関する調査

今学期は、生成系 AI を利用して作成した文章を持ち込んだセッションについて、生成系 AI の利用状況調査を行った。全セッションのうち、生成系 AI に関連するやり取りが行われたケースを記録し、その状況を整理した。

前期全セッションのうち、生成系 AI に関連するやり取りがあったものは 20 件であった。そのうち、卒業論文に関するセッションが 9 件、授業のレポートに関するセッションが 5 件であり、その他は研究計画書や教場試験の準備に関するセッションであった。執筆時における学生の生成系 AI の利用状況は、以下（表 21）のとおりである。

**表 21　生成系 AI の利用状況**

| 利用状況 | 件数 |
|---|---|
| 先行研究を探すときに利用した | 5 件 |
| 母語からの翻訳や日本語チェックや語彙調べに利用した | 5 件 |
| 自分の考えをまとめて文章化するのに利用した | 4 件 |
| アイデアを出したり、整理したりするのに利用した | 4 件 |
| AI に気になるところはないか質問した | 1 件 |
| アウトライン作成に利用した | 1 件 |

先行研究の検索、自身の考えの文章化、アイデアの整理等に生成系 AI を利用した学生が

多かった。また、留学生については、翻訳や日本語のチェックに生成系 AI を利用していることが確認された。

セッションにおいては、生成系 AI を利用して作成した文章を検討したケースが 15 件、検討しなかったケースが 5 件であった。検討したケースでは、生成系 AI を利用して自身のアイデアを文章化した学生とのセッションにおいて、学生が伝えたい内容と生成系 AI が作成した文章との間に差異があることに気づき、修正したケースがあった。また、生成系 AI が作成した文章の論理展開が不自然であったため、修正したケースも見られた。その他、生成系 AI が作成した先行研究の要約について、内容を再検討するケースもあった。

生成系 AI の利用に関するやり取りは、前期全セッションのうち 20 件にとどまったが、今回の調査から、生成系 AI を利用して作成した文章やアウトラインをライティング・ラボで検討することの必要性がうかがえる。生成系 AI を利用して作成した文章や構成にも問題が含まれる場合があることから、セッションで検討することの有効性を学生に伝えていくための工夫をしていきたい。

【所見】

生成系 AI の利用状況調査は、今学期初の試みである。データ数が少なく、全体像を把握するには至らなかった。しかしながら、生成系 AI を利用して作成した課題をライティング・ラボのセッションで検討することの有効性を確認することができた。来学期も調査を継続し、生成系 AI を利用して課題を作成する学生に対するよりよい支援について検討していきたい。また、学生に対しては、生成系 AI を利用して執筆した文章を検討するセッションの有益性を周知していきたい。

## Ⅱ-4 附属高校との高大連携

### Ⅱ-4-1　中央大学杉並高等学校チューター派遣

報告書を別添 1 に記載。

### Ⅱ-4-2 中央大学附属高等学校オンラインセッション

高大連携の促進に向けた新たな取り組みとして、今学期より中央大学附属高等学校（以下、中附）の生徒を対象としたオンラインセッションを実施した。中附では、卒業論文の執筆を 3 年生のカリキュラムとして位置付けている。これまでも支援を行ってきた中央大学杉並高等学校に加え、中附についても今学期より卒業論文の執筆を支援するセッションを開始した。

実施時期は、ライティング・ラボの大学生による利用が比較的少ない 5 月および 6 月とし、実施時間帯は高校の授業終了後である 6・7 時限目とした。実施にあたっては、週 3 回、所定の時間帯に中附生の優先予約枠を設け、大学生向けセッションと同じ Teams ミーティングを使用した。

以下、詳細を報告する。

・セッション方法：オンライン(Teams)にて実施した。
・期間：5/25～6/18 の月曜日、水曜日、木曜日(6/10 の水曜日は自宅学習日のため実施せず)
・時間(1 セッション 40 分)：①16:00-16:40 ②17:00-17:40

・セッション設置数：20(月・木２枠、水１枠を４週。6/8 のみ３枠[12])
・稼働率：85%（17／20）であった。
・5・6 月で中附３年生は卒業論文の問いを立てる。そのため、今学期のセッションで扱ったのは「問いの立て方」のみであった。主に、生徒が持ち込んだ抽象的なテーマを絞り、調査対象や調査方法を検討しつつ、テーマを深め、問いを探すセッションであった。
・8 月５日に１学期を終えての振り返りミーティングを中附教員と実施した。具体的な問いや調査方法にたどりつかない場合でも、ライティング・ラボのセッションを通して高校生が大学院生のチューターと対話することに意義があるという見解を共有した。
・チューターからは機材トラブルなどでセッション開始が遅くなる場合の延長の可否が質問された。必要な場合はその場で生徒と相談のうえ、延長する場合があることを教員より生徒に事前に周知しておくこととなった。
・利用した生徒は、チューターとの対話に概ね肯定的な感想を持っており、大学院生に自分の話を聞いてもらう機会の有益性がわかる。

【所見】
Teams への入室が遅れた場合／入室できなかった場合が見られた。入室が遅れた場合や入室できなかった場合の対応について、今後も可能な範囲で検討していく。
中附における卒業論文の執筆では、先行研究を踏まえた上で、自分なりの考えを述べることを目標としている。独自性や論証性も重要であるが、セッションでは、生徒が自身の考えをチューターとの対話を通して整理・深化させることを特に重視していきたい。

## Ⅲ 来期に向けた所見

### Ⅲ-1 チューター公募

後期のチューター公募を例年通り実施する。スケジュールは下記のとおりである。

| | |
|---|---|
| 8月31日（月） | 応募書類受付締め切り |
| 9 月8日（火） | 面接（尹先生、中野 SV、松井 ASV、林 ASV） |
| 新学期開始日 | 着任 |

### Ⅲ-2 ラボ利用促進につなげる取り組み

セッション利用率の低下が続いていることから、ラボの利用促進につながる取り組みを実施する。今後は、ライティング・ラボの「存在」「支援内容」「生成系 AI との違い」という３つの観点から取り組みを進めていく。

学生アンケートからは、ラボの存在を知らなかった、または場所がわかりにくかったという声が見られた。ラボの存在の周知については、ポスターやサイネージによる掲示に頼るだけではなく、多様な周知方法を検討していきたい。また、ラボの所在地の周知については、継続してポスターに QR コードを掲載し、ラボへのアクセス方法をわかりやすく示すなどの工夫を行う。

ラボの支援内容については、出張ガイダンス時のワンポイント講座や全学向けのワンポイント講座、学振道場等の内容を工夫し、ラボで受けられる支援を学生にわかりやすく伝える取り組みを継

[12] Teams に入ることができずセッションを受けることができなかった生徒がいた。その分を 6/8 に振り替えたため、８日のみ設置数を増やした。

続していきたい。

生成系 AI については、生成系 AI を利用して作成した課題を持ち込んだケースの調査を後期も継続して行う。チューターとの対話を通じたラボ独自の支援の有益性を明らかにし、学生に周知することで、ラボの利用促進につなげていきたい。

## Ⅲ-3 高大連携に関する取り組み

2026 年度前期より、比較的セッションに空きがある期間を活用し、中央大学杉並高等学校に加え、中央大学附属高等学校の生徒を対象としたセッションを開始した。

中央大学杉並高等学校からは、再セッションを希望する生徒への対応や、夏休み期間中の開室に関する要望が寄せられた。一度セッションを受けた生徒が、修正した文章を再度セッションで検討したケースが複数あったが、現状ではセッション数が限られているため、再セッションを希望するすべての生徒に対応できていない。また、中杉では夏休み期間中に文章を執筆するスケジュールとなっていることから、夏休み期間中のセッション利用を希望する生徒もいた。

中央大学附属高等学校のセッションについては、機材トラブル等への対応に時間を要することなどから、セッション時間の延長が必要となるケースがあったとの報告がチューターからなされた。

これらの要望については、担当チューターの負担も考慮しつつ、今後の実施可能性を検討していきたい。

以上

2026年8月31日
スーパーバイザー 中野玲子
アシスタント・スーパーバイザー 松井雄志
アソシエイト・スーパーバイザー 林雅子

【別添１】

## 2026 年度 中央大学杉並高校セッション(前期)　実施報告書

担当チューター：長江宣明、中尾友香、田井康平、宇田川恵、西脇祐

### １．セッション設置数と実績

・１セッション 40 分、開室時間①15:45-16:25 ②16:30-17:10 ③17:15-17:55
・前期は 45 回セッションを設置（前年比、９セッション増加）
・稼働率は前期 98%（44／45）であった。

＜2026 年の稼働率＞

| 月別 | 5 月 | 6 月 | 計 |
|---|---|---|---|
| セッション設置数 | 18 | 27 | 45 |
| セッション実績 | 17 | 27 | 44 |
| 稼働率 | 94 % | 100 % | 98 % |

※上記グラフは、予約を元に集計。

### 2.　ワークショップ

・前期のテーマは前年度に引き続き「問いの立て方」であった。参加チューターは田井、西脇、宇田川チューターの３名であった。参加した生徒は 36 人であった。
・前年度と同様に、今年度も「フードロス」「ボランティア活動」「若者の投票率」の３つのテーマでグループ分けをし、各グループでブレーン・ストーミングを行い、問いを深めるというワークを実施した。
・グループにより進度の違いが見られた。上手く問いを設定できないグループには、チューターが問いかけを行った。概して活発な議論が形成されており、チューターによる支援はほとんど必要ないほどであった。
・今回は開始時刻の 30 分ほど前に到着した。そのため準備の時間を十分にとることができた。
・配布するために用意した「レポートの書き方」資料の部数が足りなかった。次回は多めに持参する必要がある。
・チューターの声を聞き取りやすくするため、マイクを使用できたほうがよい。

・生徒のアンケート結果にはばらつきが見られた。
「本日の講座は有益だったと思いますか。」という問いに対して、「強くそう思う」58.3%、「ややそう思う」33.3%、「あまりそう思わない」が 8.3%という結果だった。「あまりそう思わない」と答えた生徒は、概してラボが提供する３原則とブレーン・ストーミング用マップを用いても問いを立てることになお難しさを覚えているようだった。また、チューターの声が聞き取りづらい人もいたようだった。

## 3.セッションについて

・今年度も、前年度と同様中杉の生徒が授業で使う Google Classroom から Google Meet に接続する形式のオンラインセッションと、実際にチューターが学校を訪れる対面セッションを併用した。
・前年度と同様、オンラインセッションは、中杉ミーティングルームで先生の PC を使って接続するか、自宅から通信を行う形で実施の予定であったが、結果としてほとんどの学生が学校から接続した。

## ４.所感

・今年度の生徒について
　今年度の生徒は研究計画作成が順調であるように見受けられた。前期後半の時点で序章を書き始めている生徒もいた。先生から抽象的な議論に陥りやすい論文テーマの具体例（「－の影響」等）を学んでおり、そのため具体化したテーマを扱っている生徒が多いように感じた。一方、テーマ設定で悩んでいる生徒もいた。また、アイデアはあるが文章構成の段階で悩んでいる生徒の中には、論理面で行き詰まっている生徒も見られた。セッション利用生徒にワークショップに出席したか問うと「出席した」と返答されることが多かったため、ワークショップへの出席がラボの利用につながった可能性がある。
・5 月中旬にセッションを受けた生徒が、6 月末にリピーターとして再度来室したケースが複数あった。その際、生徒自身が進捗状況を報告しつつ、卒論の構成要素における、章立てや節などを考えていくセッションを進めた。なお、6 月末は期末テスト前と重なっており、卒論を進める時間が取りづらいようだった。そのため、あえてラボの予約を取り、卒論を進めるためにセッションの時間を活用している様子が見られた。
・一部の生徒の間で「夏休みも開室してほしい」という声が出ているようである。

・オンラインセッション中の困難について
生徒の声を聞き取りづらい場合と生徒がこちらの声を聞き取りづらい場合があり、適宜確認しあいながらセッションを進める必要があった。音声の問題に関しては、中杉の教員が確認した際問題がなかった機材をその後も継続的に使用するという対応を高校側がとることで解決できた。セッション中のメモはドキュメント（個別セッション事前課題）に書き込むことが多かったが、ドキュメントを開くことができない生徒が一定数存在した。生徒のほうでもすぐに見られて保存しやすい共同編集ツールを来学期までに確認したい。

以上